

次ページへ続く

Continued on next page...

# 中田剛直氏蔵本目録稿

## 凡例

(一) 調査を許された典籍七九点を写本の部(六七点)・刊本の部(一二点)に大別し、各々系統的に列記説明を加える。「作品名」は仮題であることを示し、番号は今便宜に付したものである。

## (二) 写本の部

a 和歌歌謡・物語・日記隨筆・その他の順とし成立年代によって下位配列をおこなう。

b 注釈書は関係作品の後に置く。

c 掲出本の説明は書誌学的紹介を主とし、書写年代(含推定)・表紙(数字はセンチメートルで大きさを示す)・外題・内題・料紙・丁数行数書き入れ……の順でおこなうの原則とする。

d 特にことわらない限り卷子本Ⅱ巻、列帖装Ⅱ帖、袋綴Ⅱ冊として数量表示をする。

e 底本を引用翻刻する場合字体は現行のものに統一する。ただし宛字・仮名遣・送り仮名等は底本のままである。また表記に疑問のある場合(ママ)、推定判読の場合(?)と傍記する。

f 花押は(花押)と表わし、印文は〔印〕の如く示す。

## (三) 刊本の部

a 刊記抄録・表紙・外題・内題・本文匡郭・一面行数……の順で記述する。料紙・丁数は省略。

b その他、写本の部に準じる。

## (四) 掲出本の下に↓解題とあるものは目録の後に略解題を付す。

故中田剛直氏の蔵書は勿論七九点にとどまるはずもなく、本目録掲出分はまさしく九牛の一毛である。ただし目録の処々に散見する諸大家の書き入れや名流書紳の蔵印等々は、わずかに一斑と言えども驚嘆すべき全豹をしのぶたよりとなろう。調査を御快諾いただきながら忽卒のうちの作業であったため、体裁の不統一(写本に重点をおきすぎたことなど)、甚しき誤まり等多く存すると思われる。大方の斧正を乞うと共に、故人の学恩に報ずるにはあまりに貧しい仕事となったことを深く恥づる次第である。(目録は第一室の高田信敬が作成し、解題については伊井春樹と高田が担当した)

写本の部

(1) 古今和歌集 一冊

室町後期。香色紙表紙（二九・〇×一九・七）、外題なし。本文料紙緒紙、墨付一三三丁一面二行歌一首一行書き、朱書き入れあり。嘉禎三年八月五日日本。残花書屋旧蔵、末尾に浜男氏識語。

(2) 古今和歌集 二帖↓解題

近世前期。金茶地に蝶鳥を織り出した綴子表紙（一六・三×一八・〇）、金銀箔散らしの見返し、題簽「古今和歌集上中下」。本文料紙は藍・緑・代緒で青海波・唐草等を刷った鳥の子、墨付総数一四七行一面二行歌一首一行書き。嘉禎三年定家の奥書の後に「伝他家之奥書如此」として為家・為頭・為清の三奥書あり。「一条院良督<sup>（中略）</sup>」とした包紙中に「中河殿業長<sup>（古今和歌集全）</sup>」の極札。箱入。

(3) 古今和歌集註 四帖↓解題

近世前期。朽葉色霞文紙表紙（二六・三×一八・三）、浅葱色布目紙に金泥で松葉、梅花を描いた見返し。題簽「古今集<sup>（第廿六帖、第十一帖、第十六帖）</sup>」、内題「古今和歌集卷第一註（第二十註）」、ただし第十八註を欠く。本文料紙鳥の子、墨付総数三三五丁一面一〇行。第四帖末尾に「本奥<sup>（云）</sup>」として僻案抄奥書以下為家、為相の奥書あり。「三条西」「寺田実図書印」の印記。

(4) 訂正古今集序 一冊

近世末期。空色布目紙表紙（二六・四×一八・八）に題簽「訂正古今集

序 完」内題「訂正古今集序」。本文料紙緒紙、墨付二九丁一面一〇一〇九行、本文と同筆の朱書き入れあり。末尾に「上件おのか見たるかきりの諸本に就て誤れるを正し脱たるを補ひ謄入<sup>（？）</sup>を削り錯乱を訂しつれと尚諸本ともに脱したりとおほしきは試に補もして撰者かそのかみのおもむきに復しつる物から尚善本も世にいてはよく訂すべくこそ 安政四年六月吉日脱稿、六人部是香（花押）の奥書。国会図書館本、竹柏園本等はこの後に近藤芳樹が自ら頭注を加えた旨を記す。掲出本は芳樹の手が入る前の姿をとどめるものか。是香自筆版下本とされる露能玉籤（加賀屋善蔵が出版を予定していたところ発禁処分となった）とは別筆。「靱屋文庫」「薰木園の歌ふみの印」の印記。佐々木信綱「歌学者としての六人部是香」〔歌学論叢〕所収）参照。

(5) 古今和歌集伝授切紙 一冊

近世後期。仮綴、本文共紙表紙（二五・〇×一七・四）に打ちつけ書き「古今和歌集伝授切紙」、内題同じ。本文料紙緒紙、墨付一二丁一面一〇行。三木三鳥および伊勢物語の秘伝に清原宣賢奥書を加えたものと、三箇大事三鳥秘伝に常縁、宗祇奥書を付したものをその内容とする。

(6) 三鳥極秘 一冊

天明四年。墨色紙表紙（二三・八×一六・二）に題簽「三鳥極秘口訣」、内題「三鳥極秘」。本文料紙緒紙、墨付六丁一面九行。天明四年杉岡忠左衛門、末松宗山奥書、書写時のものと思われる。

(7) 古今和歌集東家極秘 一冊

近世後期。渋引紙表紙（二七・五×一九・九）に題簽「古今和歌集東家

極秘上、内題なし。本文料紙楮紙、墨付一一丁一面一一行。古今和歌集見聞愚記抄、僻案重口訣見聞、安秘抄など古今伝授資料を写したものの。

(8) 古今切紙次第二十三ヶ条 一冊

近世末期。仮綴、本文共紙表紙(二三・八×一七・〇)に打ちつけ書き「和歌三神伝」、内題「古今切紙次第廿三ヶ条」。本文料紙楮紙、墨付一二丁一面一一行。巻頭に「滑稽の極意」とあり、次に「一、和歌三神伝当日於神傳人丸國直法右済て後可許は 古今集切紙三十八ヶ条」とし「伊男女勢鳥」より「うすふし染といふ事」に至る三七項目と「外仮名遣ひ一冊」とした目録、さらに天文一〇年一月一日慶来、慶長六年二月西日白雲、宝暦四年九月三日五雲、安永五年八月五嶺の各奥書を付す。内題に「廿三ヶ条」とあるも本文は一九条のみ。また末尾には「以上拾六ヶ条此外住吉も御覽候へ……安永五甲年初秋五嶺師ヨリ免許依之写 遊雲井面嶺」と記す。

(10) 勅撰作者部類 三冊

近世後期。洪引紙表紙(二四・三×一八・二)に題簽「撰集作者部類上(中、下)」内題なし。本文料紙楮紙、墨付総数二二八丁一面八行、本文と同筆の朱墨書き入れあり。上冊は冒頭部分(帝王より大臣に至る)を欠き、大納言以下を収む。中、下冊は完。

(11) 続作者部類 二冊

(10)と同装訂、筆者も同一人と思われる。題簽「続作者部類上(下)」内題なし。本文料紙楮紙、墨付総数一〇八丁一面八行、朱墨書き入れあり。(10)と共に「圖書寮典籍解題文学部」参照。

(12) 作者部類 三冊

近世後期。香色布目紙表紙(二六・七×一八・七)に打ちつけ書き「作者部類上(中、下)」内題同じ。本文料紙薄様、墨付総数三一九丁一面行数不定、本文と同筆の朱墨書き入れあり。二二代集すべてにわたる作者部類。

(13) 万葉集新採百首解 二冊

宝暦二年頃、加茂貞淵自筆。薄緑色紙表紙(二七・五×一八・四)に題簽「万葉集新採百首解」(山形)内題「万葉集新採百首解巻中(下)」。本文料紙楮紙、墨付総数一一一丁一面七行八行、本文と同筆の墨書き入れあり。今上冊を欠く。

加除抹消の跡を多く留め、流布本である文政版本に比し記述が繁雑で未整理の点もあるが、流布本は転写本を基としたらしく誤脱が多い。この自筆稿本によって訂正さるべきものは枚挙に暇がない。なお本書の自筆浄書本は竹柏園旧蔵。箱入。

(14) 日本紀寛宴和歌 二冊

寛政頃。香色紙表紙(二七・二×一七・六)に題簽「日本紀寛宴和歌」(破損)内題「日本紀寛宴各分史得大鶴朝天皇二首 元慶六年」の如く記す。本文料紙楮紙、墨付総数六七丁一面九行歌一首二行書き、朱墨藍の書き入れ、朱墨の貼紙あり。うち藍筆は清水浜臣のものと思われる。村岡良弼(機斎)旧蔵。

(15) 歌仙家集 三冊

近世後期。洪引地に浮線綾を空押しした紙表紙(二六・五×一九・〇)

に打ちつけ書き「三十六人集補<sup>上、下</sup>」目録題「古歌仙集補」。本文料紙楮紙、墨付総数二二二丁一面一〇行歌一首一行書き、朱墨書き入れあり。明和三年成章識語を有するものの転写本。「北辺藏書」(富士谷家)等の印記。富士谷元広から大口鯛二あての譲状一通を付す。

(16) 歌仙家集 五冊

近世後期。縹色地に桐唐草を空押しした紙表紙(二六・七×一八・五)に題簽「歌仙家集 一(一五)」内題「柿本集<sup>上</sup>」の如く記す。本文料紙楮紙、墨付総数五六八丁一面一〇行歌一首一行書き。本文と別筆の朱藍書き入れあり。第五冊裏見返しに藍筆にて「こは加茂季鷹校合せるところ他藤原浜臣所蔵の本にて今年文化元甲子五月五日校合畢 長(花押)」と見え藍筆書き入れ時期と対校本とを知りうる。

(17) 元良親王集 一冊

近世末期。洪引紙表紙(二六・七×一八・九)に打ちつけ書き「元良親王御集」内題同じ。本文料紙楮紙、藍刷野紙に書写、墨付二〇丁一面一〇行歌一首一行書き、歌数一六八首。処々に墨で頭注を加う。野紙版心に「福田氏」とあり、福田美楯の書写。本文は第二類に属す。

(18) 曾称好忠集 春霞集 惠慶集 一冊

近世後期。薄浅葱布目紙表紙(二七・三×一八・五)に題簽「古歌集」、内題「曾称好忠家集」「詠草」「惠慶集」。本文料紙楮紙、墨付五八丁(好忠集三五丁、春霞集一〇丁、惠慶集一三丁。歌数は各々五八九首、七二首、一三五首)一面二行歌一首一行書き、本文と同筆の墨書き入れ、貼紙あり。村田春海、阪正臣旧蔵。

(19) 公任集 一冊↓解題

近世中期。薄紅地に牡丹、蓮華等を白抜きに刷った紙表紙(二七・〇×一九・七)に打ちつけ書き「四条大納言家集」内題同じ。本文料紙薄様、墨付五八丁一面一二行、歌一首一行書き歌数一六四首、朱墨書き入れあり。

(20) 紫式部集 一冊

近世後期。丁字茶紙表紙(一九・八×二二・五)に題簽「紫式部集」、内題なし。本文料紙楮紙、墨付一六丁一面一二行、歌一首一行書き歌数一二九首。此一冊定家卿自筆之本也……天文第八暮秋下旬廿九日」の奥書の後に歌六首を加う。

(21) 紫式部集 一冊

近世中期。焦茶色紙表紙(二〇・五×二三・六)に題簽「紫式部集」、内題同じ。本文料紙楮紙、墨付二五丁一面一〇行、歌一首一行書き歌数一二九首。裏見返し右下に「常樹写之」と墨書。20と共に南波浩「紫式部集の研究<sup>校異</sup>」参照。

(22) 玄々集 一冊

天保十四年。縹色紙表紙(二三・〇×一六・二)に題簽「玄々集」、内題同じ。本文料紙楮紙、墨付二二丁一面一〇行、歌一首一行書き歌数一六七首、ままた本文と同筆の書き入れあり。宝治二年、正和五年の本奥書の他に通行本に見えぬ「此書雖有黄門之奥書而星霜既旧而伝写之訛難決識者正之」の奥書を有す。「于時天保十歳龍集癸卯夷則上浣写之」の書写奥書、見返しに「美楯翁自筆<sup>紙計一葉</sup>」の貼紙あり。「福田氏藏書」の印記。

(23) 玄々集 詠歌一体 一冊

近世極初期。浅緑色紙表紙(二六・四×二一・三)に題簽「能因玄々集」  
詠歌一体、内題「玄々集」「詠歌一体」。本文料紙楮紙、墨付三二丁(玄々  
集一六丁、詠歌一体一五丁)一面二二行、玄々集の歌一首一行書歌数一  
五五首。玄々集のみに別筆の朱校合あり、玄々集と詠歌一体との間の遊  
紙に「以今并似閑子所持本一校了 嘉永六<sup>丑</sup>年季秋 太氏(花押)」と朱  
書す。(21)と共に川村晃生「能因法師集・玄々集とその研究」参照。

(24) 散木奇歌集 散木集註 三冊

安永八年頃。渋引布目紙表紙(二七・一×一九・四)に打ちつけ書き  
「散木集 上(中、下)」、内題「散木奇歌集卷第一(第十)」、散木集註  
には内題なく散木奇歌集より続けて書写。本文料紙楮紙、墨付総数二五  
三丁(うち散木集註三三丁)一面一〇行歌一首一行書き、本文と別筆の  
緑朱書き入れあり。下冊末に「右散木奇歌集二巻詠歌守宗美令新写校  
合畢 朱印元本所書加也 于時安永八己亥年正月十日 蘆庵」と見え、他の自  
筆資料と比較して書き入れは小沢蘆庵のものと思わる。新校群書類従解  
説にある水野忠欽子爵家本が本書に相当するか。散木奇歌集は大野本系  
統に属す。

(25) 鴨長明集 一冊

近世後期。緑色紙表紙(二七・八×二〇・〇)に題簽「鴨長明集」、内題  
同じ。本文料紙楮紙、墨付一八丁二面五〇六行、歌一首一行書き歌数九  
九首。「養和元年五月日 散位鴨長明」の奥書。見返しの糊がとれてはが  
れた部分(本来なら表紙にくっついていて見えない)に「鴨長明集 守

陰」とあり、書写者を示すか。本文は書陵部本に近い。「青谿書屋」(大島  
雅太郎)等の印記。

(26) 山家集 一冊

近世後期。楮素紙表紙(一四・九×一〇・七)、外題なし、内題「山家集」。  
本文料紙斐楮混ぜ漉き、墨付五二丁二面一三〇一五行歌一首一行書き。  
「以上歌数千五百五十三首本云二千五百七十二首云々……今山家集之外  
又有山家心中抄被略校此集内書出者也」とし西行に関する注記をそえた  
奥書あり。見返しに「万年の亀から見れば千年の霞はとけてひとりきゆ  
也 蜀山人」と墨書、大田南畝自筆の狂歌と思わる。「竹の屋」等の印記。

(27) 蒙求和歌 一冊

近世前期。楮素紙表紙(二七・〇×一九・八)に打ちつけ書き「蒙求和  
歌」、内題「蒙求和歌序」。本文料紙楮紙、墨付一四丁一面一〇行。蒙求  
和歌より歌のみ抜き書きしたもので、池田利夫「日中比較文学の基礎的  
研究」によれば第二類第三種に属し、伝本最稀。「滋野井文庫」(滋野井公  
庭)等の印記。

(28) 袋草紙 一冊

近世中期。薄香色紙表紙(一八・五×二〇・九)に題簽「清輔袋草子」、  
内題なし。本文料紙鳥の子、墨付八八丁二面八行漢字片仮名書き、本文  
と別筆の朱書き入れあり。雑談六四節(小沢正夫他「袋草紙注釈」によ  
る)を欠き奥書識語等一切ないが、本文は乙類(イ)に属する。「大口鯛二」  
「青谿書屋」等の印記。

(29) 俊頼髓腦 二冊

近世中期。丁字引布目紙表紙(二六・七×一九・四)に打ちつけ書き「俊頼無名抄<sup>上</sup>」(上冊には朱で「本号俊秘抄」と傍書)、内題「無名抄上<sup>上</sup>」(下冊)。「本文料紙楮紙、墨付総数一二丁二面一二行、本文と別筆の朱書き入れ、貼紙あり。書院部本と類似の奥書「寿永二年八月二日於紫金台寺見合了依知足院入道殿下命奉賀院俊頼朝臣所候(作カ)々(今カ)頭家朝臣本号俊秘抄」あり、次に「自教懿御僧相伝之 智範」と見え、さらに朱で「明治三年二月廿日磯部屋にて」(書き入れと同筆)とす。「おほくら」「不求甚解」等の印記。

(30) 悦目抄 一帖

近世中期。紺地亀甲文緞子表紙(二三・六×一七・四)、麻の葉と龍文様の金箔見返し。題簽「驚箱秘伝抄」内題「驚箱和歌極秘抄」。本文料紙は市松紗綾形等を藍刷りし処々に金泥を加えた鳥の子、墨付五二丁二面一〇行。基俊、釈阿、藤原氏(嘉禄元年月とあり)の奥書を持つ脱簡本系統に属す。箱入。

(31) 悦目抄 一冊

明治初期。仮綴、本文共紙表紙(二四・五×一七・〇)、外題なく内題「歌道根源秘書」。本文料紙楮紙、墨付七四丁二面一二行、朱墨書き入れあり。基俊より応永三年良雄に至る八つの奥書の他に、慶長四年、寛永五年、明治二年の奥書を持つ。本文は略本系統に属す。

(32) 為家口伝 耕雲口伝 筆のまよひ 詠歌一体 一冊

近世後期。洪引紙表紙(二七・三×一九・五)に題簽「為家説方抄<sup>上</sup>」、

目録題「為家説方 耕雲説方 筆のまよひ 和歌一体」。本文料紙楮紙、墨付三六丁(為家口伝六丁、耕雲口伝一二丁、筆のまよひ一二丁、詠歌一体七丁)一面二行、ごくわずかに朱書き入れあり。最終丁に「右一冊者青山百助殿以書写成者也 明和四亥仲冬 藤原定興」と見える。

(33) 西行上人談抄 一冊

天明五年。薄浅葱色布目紙表紙(二五・一×一七・五)に題簽「西行上人談抄 全」内題「西行上人談抄」。本文料紙楮紙、墨付一九行一面八行、わずかに本文と同筆の墨書き入れあり。「西行上人和歌弟子蓮阿以自筆記之云々」から「元亨第三之曆……不可有外見而已」に至る奥書を持ち、次に「此一帖今川了俊相伝之判<sup>上</sup>」とし、さらに元禄六年、元文五年、天明五年(二月元日村田並木の奥書を付す。また別筆で「こは萩屋より譲受て茂樹が所蔵なり」とある。すなわち宣長門下の村田並木書写、阪倉茂樹旧蔵。本文は甲類二種に属す。「鼓浦文庫」「神岡」等の印記。

(34) 「松永貞徳歌道秘伝書」 一冊

近世後期。仮綴、本文共紙表紙(二二・五×一七・四)に打ちつけ書き「百人一首」「源氏物語」「名鳥」「題説方」と四行に記し、その下に「秘訣」内題「百人一首五歌之秘訣切紙」「源氏物語三箇大事切紙」「名鳥秘訣口伝切紙」「題説方切紙」。本文料紙楮紙、墨付二二丁二面一〇―一二行、ままた朱墨書き入れあり。長頭丸(松永貞徳)から望月長好、平間長雅へと伝わった秘伝切紙の類をまとめたもの。奥書に見える年号のうち最も下るのは「題説方切紙」の天和三年である。小高敏郎「松永貞徳の研究 続篇」参照。

(35) 和歌極秘伝抄 一冊

近世後期。仮綴、本文共紙表紙(二四・九×一七・四)に打ちつけ書き「和歌極秘伝書」、内題「和歌極秘伝抄」。本文料紙楮紙、墨付一八丁一面一四行。歌のとまり字の口伝以下一二条にわたる目録あり、うち二条は本文より除く旨細字で注記。冒頭に「ふみとものやるへきはやりてんとてあまたとう出たる中に……教來寺のぬしのかくおもひたち……此ふみのはしにそへ候て待るとそ」と一四行にわたる序文あれども奥書識語の類は一切これを欠く。

(36) 神国和歌師資相伝正統血脈道統之譜 一冊

近世後期。渋引紙表紙(二三・五×一六・一)に打ちつけ書き「和歌血脈道統譜 全」、内題「神国和歌師資相伝正統血脈道統之譜」。本文料紙楮紙、墨付二五丁一面六行、ただし細字注多く処々に本文と同筆の朱書き入れあり。見返しに久世子爵家の蔵書票を貼る。「陽春盛記」(小中村清矩)「渡辺千秋蔵書」等の印記。

(37) 神楽註秘抄 一冊

近世後期。浅縹紙表紙(二七・五×一九・〇)に題簽「神楽註秘抄 下」、内題「神楽註秘抄」。本文料紙楮紙、墨付三九丁一面九行、安政五年直孝の手と思われる朱墨書き入れ多し。跋文の「風神楽は一越調をもて……但宮人の曲は近代うたひ絶すと云り」を欠く。康正元年有俊奥書、「以下一本を以て書入」として本文と別筆で文明八年八月五日釈有鑑、延宝二年、享保六年三月三日能勢東坡、文政四年四月三輪久和および安政五年三月二日直孝校合奥書あり。

(38) 催馬楽註秘抄 一冊

近世後期。37と同装訂、筆者も同じ。題簽「催馬楽註秘抄 上」、内題「催馬楽註秘抄」。本文料紙楮紙、墨付三五丁一面九行、37の書き入れと同筆の朱墨書き入れあり。跋文の「右催馬楽の歌曲愚案の及所……追而可書加之」は本文と別筆。奥書識語の類一切これを欠く。元来37とあわせて梁塵愚案抄一部をなしていたものらしく、ある時期に前後入れかえて題答を付し(神楽を下、催馬楽を上)、かつ37の方に奥書を集成転写したものである。

(39) 梁塵愚案抄 一冊

文化三年。大和綴、渋引紙表紙(二七・五×二〇・〇)に打ちつけ書き「梁塵愚案抄」、内題「梁塵愚案抄 卷上」「梁塵愚案抄 卷下」。本文料紙楮紙、墨付五七丁一面一二行、朱墨書き入れあり。上巻末に康正元年九月二月有俊、文明元年八月五日有瑞、明応八年初夏上旬四条隆量、同九年(署名なきも蓮空か)、大永三年二月中山龍作、同三年三月五日清原宣賢の各奥書。下巻末に康正三年九月尽有俊、文明三年九月六日(署名なきも有瑞か)、東左近將監(東頼数か)、明応八年六月七日老翁(四条隆量)、同九年蓮空、頼長、大永三年二月中山龍作(宣親、号聯航軒?)と細字注あるも、九条家本公卿補任に中山宣親に関して「永正四年十月四日薨六十才」と見え、不審、同三年三月五日清原宣賢の各奥書あり。また裏見返しに本文と別筆で「文化十二年秋令写畢 権大納言(花押)」と記す。これは外題と同じ手であり、他人に本文を写さしめ、外題識語を権大納言某が認めたもの。



(40) 〔謄本〕 一帖

近世初期。栗皮色紙表紙（二三・九×一七・九）、外題内題共になし。本文料紙斐摺混ぜ漉き、墨付一九二丁一面二行、本文と同筆の朱墨書き入れ、節付あり、「大倉」に貼紙一葉。見返しが目録になっており、「皇帝」以下「誓願寺」まで五〇曲の題を載す。ただし目録にあって本文になきもの「杜若」、目録に見えずしかも本文にあるもの「上宮太子」以下「石橋」まで五曲（この部分別筆）。書き入れは大むね朱で本文の傍に仕舞付、墨で頭書に装束付を記す。一部破損。

(41) 竹取物語 一冊

近世中期。灰色地に金切箔を散らした紙表紙（二九・一×二〇・八）に題簽「たけとり物語」、内題「たけとりもの語」。本文料紙鳥の子、墨付三一丁一面一〇行、朱校合、墨頭書あり。中田剛直『竹取物語の研究』校訂 中田剛直に通行本系第三種のロとして紹介。

(42) 伊勢物語 一帖

室町後期。利久鼠紙表紙（二七・四×一六・二）に題簽「伊勢物語」、内題なし。本文料紙鳥の子、墨付七九丁一面一〇行。武田本奥書の後に別筆で「堯恵所持」、裏見返しに「こ五うへまいらせ候」と墨書。伊勢物語 青口（蓮カ）院殿尊応准后御筆（仙室）とした初代畠山牛庵の極札あるも他の資料と比較するに尊応（二条持基次男、永正二年没）筆とは認めがたい。池田亀鑑『伊勢物語につきての研究』に武田本第三類、三条西本として紹介。箱入。

(43) 伊勢物語 一帖

室町後期。牡丹唐草を織り出した金茶色絹表紙（二三・七×一六・二）、銀切箔野毛をまいた見返し。題簽「伊勢物語」、内題なし。本文料紙斐摺混ぜ漉き、墨付八〇丁一面九行。流布本（根源本）奥書勘物、次に「一本云」として武田本奥書、「以祖父卿真筆本……可備証本矣 藤為相」天福本奥書、さらに「本云」として天福本系第一類法橋玄津本の玄津と正徹の奥書を付す。

(44) 伊勢物語 一帖

近世初期。紺色紙表紙（一六・六×一七・三）に題簽「伊勢物語」、内題なし。本文料紙は雲母を引いた鳥の子、墨付八七丁一面一〇行、ごくわずか朱書き入れあり。天福本奥書の次に武田本流布本奥書を付し、さらに「此伊勢物語者為梅億宗田兼如法師、以所持本書寫畢一校之次誌之者也 于時天正七年季春下旬 城南 紹巴判」と見ゆ。「定法寺心祐僧正 伊勢物語 全一冊」伊勢物語「琴山」の極札を添える。池田亀鑑前掲書に天福本系第四類紹巴本として紹介。「三条西」の印記。

(45) 伊勢物語 一帖

延宝五年。利久鼠地に金で青海波鳳凰等を織り出した緞子表紙（二四・八×一八・三）、布目紙に金箔を散らした見返しで近年の改装と思われる。外題内題なし。本文料紙は青・緑・黄と素紙の色変り鳥の子、墨付九二丁一面八行。武田本奥書の次に也足更奥書を持ち、さらに「此一帖以也足更自筆之本不違一字令書写者也 于時延宝五年林鐘日 羽林中郎將藤原嗣章」この部分別筆の如し。親本たる中院通勝筆本は宝玲文庫を経て現在天理図書館蔵。「伊勢物語 筆數中将殿 外題中院大納言殿 通光卿」と

した折紙を付す。箱入。

(46) 伊勢物語 四十二の物あらそひ 一帖

近世中期。栗皮色紙表紙(二五・四×一七・五)に打ちつけ書き「伊勢物語」内題二作品ともなし。緑・薄紅・黄・素紙の色変り鳥の子、墨付九八丁(伊勢物語七二丁、四十二の物あらそひ二四丁、落書き風に古歌を写したものと二丁)一面九行。伊勢物語に奥書勅物の類一切ないが、本文は武田本系。四十二の物あらそひは「このへとの」と題する長歌を持つ系統。最終丁に「おもしろきふしはなけれとのそまれてさんする人は加茂の季鷹」と別筆で墨書(季鷹の自書か)。「青谿書屋」の印記。

(47) 伊勢物語肖聞抄 一帖↓解題

室町後期。薄香色地に銀で細紋を刷った紙表紙(二八・〇×二〇・四)、金銀切箔散らしの見返し、外題内題なし。本文料紙鳥の子、墨付九〇丁一面一二行、朱書き入れあり。奥書識語の類は一切ないが肖聞抄の延徳三年本系統に属する。「伊勢物語聞書抄」<sup>傳札有</sup>「別筆で「肖聞抄の異本歟」と傍書)とした袋付。現在極札見えず。「青谿書屋」の印記。

(48) 伊勢物語奥旨秘訣 一冊

近世後期。仮綴、本文共紙表紙(二二・六×一七・四)に打ちつけ書き「伊勢物語秘訣」内題「伊勢物語奥旨秘訣」。本文料紙楮紙、墨付一八丁一面九〜一二行、朱書き入れあり。題号口訣以下極秘七箇大事裏説口訣まで五ヶ条にわたる。慶安元年八月六日長頭丸(松永貞徳)、寛文八年二月三日長好、延宝九年三月三日長雅の奥書。(49)と同筆同体裁で貞徳の歌道秘伝書として一括まとまっていたものか。小高敏郎「松永貞徳の研究

続篇」、大津有一「伊勢物語古註釈の研究」参照。

(49) よしやあしや 二冊

安永九年。代赫色紙表紙(二七・四×二〇・二)に題簽「葭平蘆乎天」「よしやあしや 地」内題なし。本文料紙楮紙、墨付総数一六六丁二面一二行、朱墨書き入れあり(下冊半ば以降朱書き入れなし)。秋成殿文の後に「宇倍田大人の書しるし給ふよしやあしや一巻頭書朱書もそのままにうつし侍りぬ 安永九霜降月 飛田由喜」の書写奥書。伊勢物語古意付録の版本よしやあしやとは全く別内容。「芝川図書」の印記。

(50) 源氏五十四帖 一冊

元禄六年。紺色紙表紙(二三・四×一六・五)に題簽「源氏五十四帖」、内題なし。本文料紙楮紙、墨付四七丁二面一二行。「是大概計也源氏五十四帖かつしるす許也 元禄六年西ふみ月二日 重之書」とあり、別筆で「谷津伝次郎茂房(花押)」と所持者とおぼしき人物の署名。源氏物語の梗概書である。「竹の屋」の印記。

(51) 原中最秘抄 一冊

近世中期。白緑紙表紙(二七・一×一九・四)に打ちつけ書き「原中最秘抄」内題「原中最秘抄」。本文料紙楮紙、墨付六二丁一面九行。「原中最秘抄者光源氏物語先覚行阿法師所撰述也……(和歌二首) 畦雲山人明魏<sup>朱印</sup>」の奥書を持つ抄略本系統。九条(九条家)の印記。

(52) 口伝抄 伏屋塵 一冊

近世中期。洪引紙表紙(二三・一×一六・二)に題簽「口伝抄 全」内題「口伝抄」「伏屋塵」。本文料紙楮紙、墨付一〇丁(口伝抄五丁、伏屋塵

五丁) 一面二行。口伝抄には「文明三年二月三日以禅閣一茶殿御自筆秘本密々令書写……博陸候某員公御判」の奥書、伏屋塵には奥書識語の類なし。

(53) 覚勝院抄 五冊

近世中期。香色地藍吹墨布目紙表紙(二八・二×二〇・六)に打ちつけ書き「はゝき、うつせみ」夕かほ「あけまき さわらひ」「かけろふ」「てならひ 夢のうきはし」内題「筈木 第二」「空蟬並也」……「夢浮橋字」の如く記す。本文料紙鳥の子、墨付総数三八〇丁一面二行、朱墨書き入れおよび貼紙多し。覚勝院抄八卷五冊分のみの零本。「白水蔵書」の印記。

(54) 源氏物語系図 一帖↓解題

近世初期。栗皮色紙表紙(二二・八×一七・〇)、外題内題なし。本文料紙鳥の子、墨付三三丁一面二行、墨書き入れあり。耕閑軒堪得之本恩借之即時令書写 件本自然齋耕閑軒相談添削之本云々、次に「慶長十九年甲寅孟冬上旬京一条にて書之」と記す。慶長十九年かあるいはそれに近い頃の書写。見返しと第一丁表一行目まで「辞うむつかし」の如く書き入れと同筆で難語を摘記する。本文と書き入れとは墨色に差あるも、にわかと同筆か別筆か判じがたい。源氏物語系図実隆本系に「肖柏等相談之 訪宗祇法師指南」の字句が見えるが、兼載(耕閑軒)と宗祇(自然齋)談合の件は傍証管見に及ばず。

(55) 浜松中納言物語 一冊

近世中期。石竹色地墨流し紙表紙(一五・〇×二一・四)に打ちつけ書

き「浜松物かたり」内題「浜松中納言」。本文料紙薄様、墨付一〇三丁一面二五行の細字写本で本文と同筆の墨書き入れ少々。巻五を欠き、小松茂美「校本 浜松中納言物語」の分類A系統に属す。「月明荘」「反町弘文荘」の印記。

(56) 唐物語補 十六夜日記長歌 一冊

明治期。香色紙表紙(二四・四×一六・六)に打ちつけ書き「からものかたり補 いさよひの日記長歌」。唐物語補は内題なく本文料紙緒紙、墨付二〇丁一面一〇行、「明治己丑五月借於師家写以補和文教科書省略者也 藤仁之」の奥書。次に同質紙を扉として「此本係藤原十六夜日記原本 十六夜日記長歌本書文 同奥書 同冷泉家本奥書」と墨書、一面一〇行藍刷

野紙八丁に長歌および奥書とその略注、薄様四丁に「左にあるは冷泉家本の奥書なれどいとめづらかなれば文字もそのままに写してここにのせつ 阿仏房のかな書之内」として四条局仮名諷誦の一部を写し、さらに「不知夜記阿仏房鎌倉紀行也阿仏房葛原親王十一代後胤佐渡守度繁女安嘉門院右衛門佐為相卿母後為尼名阿仏房寛文年中焼失今於是模写而已 延宝五年冬後士月十日 右近衛権少将藤原(花押)」(細字で「印文ハ朱白交字ニテ冷泉藤原為経ノ六字アリ」と傍書)とある。墨付合計三三丁。「佐藤仁之助蔵書」等の印記。十六夜日記の後に仮名諷誦を付したものは天理図書館現蔵九条家本があるが、右の奥書を持つものは不見。

(57) 土佐日記 一冊

近世前期。紺色地に紗綾形を空押しした紙表紙(二六・五×一八・二)に打ちつけ書き「(かすれて不能読) 佐ノ(日カ)記」内題「土佐日

「記」本文料紙楮紙、墨付一九丁一面二行、朱墨書き入れあり。明応壬子（元年）亜槐藤臣（実隆）の奥書と勘物を持つ。

(58) 土佐日記註 二冊

近世後期。洪格子模様紙表紙（二六・五×一八・二）に打ちつけ書き「土佐日記」（表紙右肩に「静舎抄 県居考」、上田秋成の序文あって次に内題「土佐日記」。本文料紙楮紙、墨付総数九二丁一面一〇行、本文と同筆の朱書き入れあり。明和五年跋を持つ加藤宇万俊の土佐日記註に秋成序文を付し（ただし秋成自筆本に見える「寛政二年……鶉の屋にてうつしをさめぬ」を欠く。また享和二年の跋文もなし）、朱で「師説」「大人説」のごとく頭注を加う。国語国文学研究史大成「平安日記」に紹介の秋成自筆土佐日記解とは別内容。「篋園文庫」（竹内篋園）等の印記。

(59) 紫式部日記 一冊

近世後期。縹色地に雲鳳凰を空押しした紙表紙（二七・五×一九・四）に題簽「むらさきの記」、内題同じ。本文料紙楮紙、墨付四三丁一面一〇行、本文と同筆の朱墨書き入れあり。末尾に寛弘五年の公卿等の補任を載すも奥書識語の類なし。本文は第二類に属す。池田龜鑑「紫式部日記」参照。

(60) 松島日記 一冊

宝暦三年。仮綴、本文共紙表紙（二三・七×二六・八）に打ちつけ書き「まつ島日記 完」、内題「松島日記」。本文料紙楮紙、墨付一二丁一面一行、朱墨書き入れあり。「右之巻号松島日記絵図者土佐光俊蒙 仁治皇帝之勅製之今惜 道朝親主之御本写之畢 寛正三年<sub>壬午</sub>年十月下旬 源教

具」以下「右清女松島日記は……宝暦第三癸酉年冬十月下浣於浪華書之郡親良」（署名の下に印二顆あれども不能読）に至る八奥書あり、その一つ享保七年の高崎寛敬奥書により、歌僧空華庵忍鐙の手を経たものであることがわかる。

(61) 枕草紙装束抄 定家卿五行五色和歌 女房三十六人歌合 集外歌仙 小野小町集 在原業平小野小町和歌問答 一冊

享和三年。楓模様を白抜きした藍吹墨紙表紙（二二・七×一六・一）に題簽「枕草紙装束抄<sub>全</sub> 定家五行五色歌 女三十六歌仙 集外三十六人 小野小町家集 同歌問答」、内題「清少納言枕草紙装束抄」「定家卿五色和歌 同五行和歌」「女三十六歌仙」「集外歌仙三十六人」「小野小町家集」「小町業平歌問答」、墨付二四丁一面行数不定。装束抄末尾に「于時享和三<sub>亥</sub> 秋九月上旬書写之 岡内藏之助謹書」、巻末に「于時享和三<sub>亥</sub> 九月上卯日 岡内藏之助謹書」とあり。定家卿五行和歌は拾遺愚草員外より一〇首書き抜いたもの、小町集は歌仙家集本系に属す。

(62) 徒然草 二冊

近世初期。丹紙表紙（二〇・五）×（一三・五）に打ちつけ書き「つれく草」、内題なし。本文料紙烏の子、墨付総数一三二丁一面八行、ままた朱墨書き入れあり。奥書識語の類一切これを欠くが、本文は正徹本系統と思われる。

(63) 徒然草 一冊

近世前期。藍刷毛目紙表紙（二九・六×二二・二）に題簽「つれく草」、内題なし。本文料紙楮紙、墨付九八丁一面二行、朱合点あり。「此つれ

〈草一冊者依所望染筆者也。靈鑑寺宮光山<sup>(宋)</sup>書之「宋采」とし、別筆貼紙「宋采<sup>佛僧寂照堂寫真</sup>」。本文は烏丸本系統。

(64) 徒然草 二冊

近世中期。仮綴本文共紙表紙(二四・七×一六・九)に打ちつけ書き「つれく草 上(下)」、内題なし。本文料紙楮紙、墨付総数一四九丁一面九行、本文と同筆の墨書き入れあり。冷泉流の書風で奥書識語の類一切これを欠くが、本文は烏丸本系統と思わる。

(65) 江談抄 二冊

近世中期。藍地に紗綾形・唐草を空押しした紙表紙(二七・一×一九・二)に打ちつけ書き「江談抄<sup>聖</sup>」(下冊には外題なし)、内題「江談抄第一(第五)」。本文料紙薄様、墨付総数七八丁一面二行、本文と同筆の墨書き入れあり。下冊末に「以或人之本書写之早卒之間不及校合文字不審等多得正本正之矣 宗永(芸叢)(豊蔭家庫)」の奥書。宗永は伊達綱村の弟、田村家を継ぎ田村宗永を名のる。浅野内匠頭長矩の切腹したのはこの人の屋敷に於てである。第六長句時に相当する巻を欠き、各巻巻頭に目録を付す。本文は流布本系統。「芸叢之印」(田村宗永)の印記。

(66) 古事談 三冊

近世中期。白茶色布目紙表紙(二三・一×一六・一)に題簽「古事談上(中、下)」、内題「古事談第一(第六)」。本文料紙斐楮混ぜ漉き、かなり以前に裏打補修を加え(朱書き入れは補修以降)、その際天地、特に地を大きく裁っている。墨付総数二三〇丁二面八行、本文と別筆(青木信寅か)の朱校合あり、他に墨書き入れ。上冊末に「丹鶴叢書本と異なる

もの「字<sup>丹</sup>」と朱傍書丹本異本と校合して「字<sup>イ</sup>」とあるは同じく「字<sup>イ</sup>」として丹本なる事を残さず其異本か本書と同じきは略之丹鶴叢書本と比較して魯魚の誤を訂す 本書所々一段又二三段の脱漏あり又事醜猥に渉るものは之を除きたるか如し、下冊末に「以丹鶴叢書本一校了同書として校合せる所多く本書に合す」と朱書(書き入れと同筆)。好色譚に類するものを欠脱させた第一類本(略本)系統に属す。欠脱部分には「此間一条略<sup>原本如此</sup>」と墨頭書あり。上冊表紙に「青木印」(青木信寅)の蔵書票、「青谿書屋」の印記。

(67) 雑問答考 一冊

近世後期。仮綴、本文共紙表紙(二七・五×一九・五)に打ちつけ書き「雑問答考 完」(「加茂真淵」と朱傍書)、内題「雑問答考」。本文料紙楮紙、墨付二六丁一面一三行。反故を利用した目録一葉別添。真淵全集所載のものと比較するに小異あり、「讓位踐祚」「五位の中將」の項は全集本の頭書が本文化している。宝暦九年八月真淵奥書。

刊本の部

(68) 懷風藻 一冊

寛政五年竹苞楼(裏寛返しに「寺町通本能寺前 皇都 錢屋惣四郎」)。黒紫色紙表紙(二六・〇×一八・〇)に単辺題簽「懷風詩集」、内題「懷風藻」。四周双辺(一八・八×一二・七)一面八行(序六行、跋七行)。版心「懷風藻」。「葵山文庫」の印記。

(69) 古今和歌六帖 九冊

寛文九年吉田四郎右衛門・栗山宇兵衛開板。紺色紙表紙(二六・三×一八・二)に単辺題簽「古今和歌六帖」(上・下)、「内題」古今和歌六帖第一(一第六)。四周単辺(二一・七×一六・六)一面一行。詳細な朱書き入れを持ち第九冊裏見返しに「右全部に朱書入は先師富士谷御杖也門人福田美楠写之 嘉永二酉年正月小川魚臣又写之 此朱書尤有益也門外不出之者也」と朱書。刊記のある丁に朱と同筆の墨書「すへて此帖……心えさせたまふへし」の跋文(寛文九年版古今和歌六帖に数種あり、吉田四郎右衛門のかかわったものにはこの跋文を欠く)、さらに朱で「福田氏藏本如此之板文あり余か藏本全く同板本にして此末文無之」。朱書き入れのほとんどは出典注記と異本校合である。「萩舎」「下田氏記」「紅梅文庫」「前田善子」等の印記。

(70) 桧垣家集補註 二冊

天保年間、英大助・秋田太右衛門(広告による)。浅葱色布目紙表紙(二五・五×一七・八)に単辺題簽「桧垣家集補註」上・下、「内題」桧垣家集補註。四周単辺(一八・八×一二・七)一面九行、絵五面。版心「桧垣家集補註上(下) 丁」。丁。

(71) 八雲御抄 三冊

万治二年中野氏道也新刊。栗皮色紙表紙(二七・三×一八・五)に打ちつけ書き「八雲御抄」(二四五六)。「第二冊には外題なし」、内題「八雲抄第一(一第六)」。一面二一行(序八行)、版心「八雲抄一(一六) 丁」。第一冊末尾に文永五年為家奥書(紫)、正慶三年以下弘安八年玄覺奥書(朱)、

「私云弘安ハ後宇多院年号……為家卿奥書文永五年ハ弘安ヨリ士年以前也」(藍)、さらに「二 講師」として巻二講師の条を二〇行に墨書(ちなみに本文巻二当該部分には「此所ノ次第前後錯雜末ニ墨書一葉記之可見」と藍筆頭書)。第三冊末尾に「本」至徳二年乙丑九月五日以綾小路羽林<sup>賢</sup>御本書写之走筆之間其誤不可勝計 又本云 徳治第三<sup>戊申</sup>二月九

日自第一至第六以馳筆畢更々不可有外見者也殊可秘々々 右六冊一覽畢天正五年八月日<sup>癸亥</sup>玄旨(花押)と他本奥書を墨筆転写。朱墨藍紫の四筆書き入れだが同一人の手になる如く思われ、朱は幽齋本、紫は為家本との校合である由巻第一冒頭に見ゆ。元来七冊本を改裝。

(72) 和漢朗詠集註 九冊

無刊記、寛文二年版の後刷。墨色紙表紙(二七・一×一九・二)に題簽「和漢朗詠集註一(一九)」(第九冊は巻九と十とを合冊)、内題「和漢朗詠集註巻第一(一第十)」。四周単辺(二一・七×一五・七)一面一三行(序九行)。版心は花口魚尾に「朗詠集註一(一十) 上丁」。

(73) 竹取物語 一冊

正保三年林甚右衛門尉。藍色紙表紙(二七・七×一七・六)に打ちつけ書き「たけとり物語」上・下、「内題」たけとり物語。四周単辺(一九・九×一四・七)一面二一行。版心「たけ上(下) 丁」。巻末に真淵説や韻府群玉を引いた度会正董(荒木田久老)の墨書を一葉補綴する。中田剛直

(74) 伊勢物語集註 九冊

「竹取物語の研究」(昭和四十四年)に通行本系第二類として紹介。巻十以降を欠くため刊年不明、承応二年版の後刷か。錆納戸色地に紗綾

形・蓮華唐草を空押しした紙表紙(二七・二×一七・九)に双辺題簽「伊勢物語集註三」(九)〔第一冊は題簽破損甚しく不能読、内題「伊勢物語集註卷一(一巻九)」。二面一行、版心「集註一卷(一巻九)」丁付。朱墨書き入れあり。

(75) 十六夜日記 一冊

万治二年林和泉板行。紺色紙表紙(二二・二×一五・七)、題簽落剝、内題「いさよひの日記」四周単辺(二六・八×一一・五)一面一〇行。版心「イ 丁付」。絵三面。末尾に正徳六<sub>丙申</sub>天六月□(一字不能読)ク求」と朱書。

(76) 枕草子春曙抄 付録抄 一三冊

春曙抄無刊記、装束抄は享保四年上坂勘兵衛源兼勝発梓。紺色紙表紙(二七・一×一八・八)に単辺題簽「枕草子春曙抄」(十二<sub>卷</sub>)「枕草子装束抄」内題各々「春曙抄」清少納言枕草紙装束撮要抄。四周単辺(二二・三×一七・八、装束抄は二二・二×一七・五)一面二行。版心「春曙一(一十二) 丁付」装束抄 丁付。第一冊見返しに武藤元信の藍筆識語があり、慶長頃写の本居豊頼蔵枕草子三冊で校合を加えたことを示す。同じく武蔵翁の手で朱頭注を施す。これらの作業は「枕草子通釈」著述のためのものである。校合された豊頼本は三巻本系第二類に属すと思われるが、現所在不明。「武蔵元信」等の印記。第一冊第二丁第二丁が逆順になっている。

(77) 枕草子春曙抄 一二冊

(76)の後刷、書誌は略す。第一冊発端第三丁を欠く。第一冊見返しに朱で

「校本目録 天文二年古写本<sub>中ニ</sub> 枕草子万歳抄<sub>中ニ</sub> 契沖及真淵宣長春海浜臣等校合 伊勢貞文<sub>マツ</sub>枕草子抄」と見え本文中に同筆の朱校合、またこれとは別筆の墨書き入れあり。校合された天文本は三巻本系統か。「静筆舎」隣柿庵の印記。なお野村賣次「枕草子春曙抄」上木に就いての管見(甲南大学紀要三三)参照。

(78) 閑居友 二冊

無刊記、明治刷。大和綴、朱色地に紗綾形・唐草等を空押しした紙表紙(二五・七×一八・六)に題簽「閑居友」<sub>慈和堂書</sub>上(下)、内題「閑居友卷之上(下)」。四周単辺(二二・三×一六・五)一面二行。版心「閑居友上(下) 丁付」。

(79) 風流志道軒伝 五冊

宝暦三年版の後刷か、河内屋茂兵衛他一〇名の連記。空色紙表紙(二一・六×一四・八)に双辺題簽「風流志道軒伝」(五)、内題「風流志道軒伝卷之一(一五)」。四周単辺(二七・六×一三・一)一面一〇行(序六・七行、跋八行)。版心「風流志道軒伝 卷一(一五) 丁付」。絵各冊二面。卷四、五に各々四丁の河内屋茂兵衛広告を付す。「只誠蔵」(関根只誠)「十香書屋」の印記。

(2) 古今和歌集

嘉禎三年八月五日定家書写本は松田武夫「勅撰和歌集の研究」西下経一「古今集の伝本の研究」に吉川家蔵のものが紹介されていて、それは定家——為家——為秀……—為富と冷泉家に伝来したものであることが奥書に示される。中田本は定家——為家——為顕——為清と伝えられ、両者共通の奥書は定家のそれのみである。今中田本奥書を左に記す。

伝他家<sup>五</sup> 奥書如此

戸部尚書藤原以下

中納言為家

任先師之庭訓之儀為相伝以来随

分之秘藏々々備証本者也後学

遺鏡記畢穴賢々々当家莫於

窓外而已努々秘之

弘長元年<sup>辛酉</sup>初春之天 花落隱士融覚在判<sup>為家即法名</sup>

侍従為顕

於此集者不先達儀主に今以定

家卿自書写来者也僻案之

輩卒爾用之講書生之失錯

為和歌之衰微之基不可然努々

不可聊爾秘藏可備証本者也

穴賢々々当家莫出窓外而已可

秘々々

永仁三<sup>壬子</sup> 初秋桑門明覚在判<sup>為顕法名</sup>

侍従為清

此本外又以定家卿自筆本

校合畢則所違此本勘注之

井上宗雄「中世歌壇史の研究 南北朝期」によれば、神宮文庫本古今灌頂巻に定家——明覚——和阿（為清）の相伝系図があり、為清は為氏曾孫ながら為顕系に属した人物とされる。定家本中比較的伝本の稀な嘉禎三年八月五日日本の、しかも特異な伝来奥書を有する美麗写本として貴とすべきものであらう。なお「古今和歌集 三条西家旧蔵本」とした小紙片あり。

(3) 「古今和歌集註」

僻案抄（嘉祿二年）奥書の次に

此草注付之後拾遺相公一人之外

更不令他見至嘉禎四年忝依

承旧之論言注付<sup>（マツ）</sup> 矣

安元元年<sup>（マツ）</sup> 丁未六月日 戸部尚書<sup>在判</sup>

とあり、これは僻案抄延応二年奥書の後半部分とほぼ一致する。さらに



「本奥書云」として

亡父京極黃門之自五条三品之

許相伝之註文加之見所及渥<sup>(マツ)</sup>

分不殘秘事註付也

所相伝大夫為相也<sup>矣</sup>

正元々年三月某日融覺<sup>在判</sup>

以三代撰者秘註所相伝大江広貞也

永仁五年五日(三月)を脱したるか)

左近中将藤原朝臣為相<sup>舊</sup>

と見える。これらの奥書の持つ問題に関しては、井上宗雄「中世歌壇史の研究 南北朝期」を参照されたい。さて掲出本は松田武雄「勅撰和歌集の研究」に二〇冊の注釈書京都帝大研究室蔵古今和歌集として紹介されたものと同内容で、第一註冒頭に「題名の事先段にてすてに註之畢」とあり、題名註あるいは序註が別に存在していたことを思わせる。ところで当館蔵初雁文庫本古今和歌集序註は序註十巻のうち第三を欠き、古今和歌集巻第一註を持っている。書風装訂とも一貫しており(近世後期写)、かつて序註と本文註とが揃って一部の書をなし、その冒頭部分一〇冊がまとまって残ったと考えられるのであるが、その第一註と掲出本第一註とは同内容である(ただし初雁本は末尾若干を欠く)。したがって元来序註一〇冊本文註二〇冊都合三〇冊の大部なものであった可能性が高い。書誌的なことがらを付言すれば、形状からみても二〇帖に分巻し

ていたものを、第一八註の欠脱の後四帖に合冊したものであろう。

#### (19) 四条大納言家集

「公任集」の伝本については、竹石美智子氏の「公任集に関する一考察」(『国文』第23号)が唯一と言ってよく、そこで整理された類従本などの(一)流布本系統と、書陵部本などの(二)異本系統に分ける説が今日も継承される。(一)流布本の判定には、①「流れゆく」(二九三と二九四の間、私家集大成番号。以下同じ)・②「白山に」(二一九と二二〇の間)・③「秋ふかみ」(二二二と二二三の間)・④「色ふかき」(二五六と二六七の間)・⑤「うの花の」(三三一と三三二の間)・⑥「今はとて」(三九九と四〇〇の間)の六首を持ち異本にはないこと、(二)異本は①「みかさ山」(二八)・②「世の中に」(五六一)・③「つねならぬ」(五六二)・④「ひととせを」(五六三)・⑤「ふる郷の」(五六四)・⑥「谷風の」(五六五)の六首を持ち、流布本にはないことが指摘される。流布本の特色とされる六首はいずれも重出歌であり、異本になるとこれは削除され、かわりに巻末に五首の勅撰集入集歌が付加される。こういった現象によって、流布本がより原形に近く、異本はその後の改訂本と位置づけられている。

この二系統は、類従本と書陵部本を代表とする写本の整理においては有効だが、それだけでは処理しきれない伝本も存在する。ここではさしあたり、類従本系統を第一類、書陵部本系統を第二類、それ以外を第三類と呼んでおくことにする。この第三類は系統的にまとまっているわけではなく、伝本によってそれぞれ内容を異にする。そういった意味でこの第三類は、包括的なその他の伝本と称することができよう。ここに紹

介する中田本も、その一つである。

第三類本は、歌の出入りが伝本によって異なる。例えば三手文庫全井  
似閑本「公任集」(「小侍従集」等と合冊)は、ほとんど第一類本と称して  
もよいのだが、巻末に第二類本特有の「世中に」以下の五首を持つ。こ  
れは第一類本を書写した後、第二類本から五首を転写してできあがった  
伝本であろう。これなどは、混雑的な性格を有していると言える。

三手文庫泉亭本「四條大納言公任集」の場合は、全体が第二類本の特  
色を持ちながらも、第一類本の①「流れゆく」・⑥「今はとて」の両首  
が挿入されている。

さらに中田本になると一層複雑となり、まず第一類本の判定基準の六  
首のうち、①③④⑤はなく、②⑥は収載される。これだけだと第二類本  
の性格がより強いと言える。次に第二類本の特色とされる六首のうち、  
④以外はなく、②③が「イ本」として朱筆により書入れられる。これだ  
と、今度は第一類本の性格を強く持つことになる。これだ

これだけでなく、中田本には次に示すような第一類・第二類本の整理  
からはみ出た現象が、種々指摘できる。

(1)「世の中に」(二一九)の後に、次のような二首の歌を持つ。

返し

同  
常ならぬ世はうき身こそ悲しけれその数にたにい。た葉無らしとおもへ  
は

ある女に

白山に年ふる雪や増るらん夜半にかたしき衣さゆなり

後者の「白山に」の方は、すでに述べたように第一類本を継承してい  
るのであろうが、問題は初めの「常ならぬ」の歌である。これは他の伝  
本にはまったく見あたらない。その前に位置する「世の中に」の肩付け  
に「拾遺哀傷」とあり、「常ならぬ」の歌に「同」とするようにな、この両  
首は「拾遺集」巻二十哀傷部の為頼と公任による贈答歌である。為頼の  
歌だけが収められていて公任の返しがないのを知り、後人が「拾遺集」  
から補ったのであろうか。

(2)巻末には、改訂して次のような四首が並べられる。

右大臣家づくりあらためて渡りはしめけるころ文づくり哥など

人々によませ侍りけるに水樹多佳趣といふ歌を

①任拾遺集そむる末の心のみゆるかな汀の松のかけをうつせは

因幡守になりて下りけるに弓をつかはすとて

②咲同賀はなのかしらの雪にまかへても千代のかさはおりにあふらし

大内の花の陰にてよみ侍ける

③梓弓引とゝめてもみてしかないはは恋しと思へければ

速見浦松葉集

④わきもこをはやみの浦の思ひ草しけりもまさる恋もする哉

これらはいずれも公任の歌で、「公任集」には見あたらない。公任の全  
歌を集める目的で、他の歌集から拾い出して付加したものと思われる。

②と③は順序を逆にする符号が付されるように、「咲はなの」の肩に「同  
賀」とするのは「続千載集」の賀部を意味する。また④は「松葉名所和  
歌集」の所載歌で、そこには「良玉」とすでに記されている。

第二類本の巻末に置かれる五首は、勅撰集に入集された公任歌を採録したのだが、中田本の右の四首はさらにそれを補った体裁となっている。ただそのためには、第二類本の五首が前提となるはずである。ところがすでに触れたように、中田本は第二類本の五首のうち「一年を」の歌を持つだけで、あと「世の中に」と「つねならぬ」は「イ本上東門院云々の前に左の二首あり」と朱によって書入れられているにすぎない。このあたり第一類本・第二類本との複雑な成立関係が背後にあるのだろうか、今のところこれ以上のことは知り得ない。

(3)細字によって「朝ぼらけ」(四四)「いそぐべき」(七七)「暮がたき」(四一二)「山よりも」(四八三)の四首が余白に補入される。筆跡は明らかではないが、本文とは別筆と思われる。四一二は詞書だけがあるので、これは明らかに書写者のミスと思われるが、他の三首も同じ単純な脱落なのか、底本に存在しなかったのか気になるところである。

(4)右とも関連するのだろうか、「今はとて」(四七九)の歌が詞書とともに記されていない。写し漏らしをしたものの、後人が他本と校合して補入するのを見すごしたのであろうか。

(5)歌の順序が逆になっている例が、二箇所見いだされる。「恋忙て」(二四六)「此春は」(二四五)と「谷風に」(五五二)「都出て」(五五一)の部分で、いずれも他本と配列を異にする。

そのほか中田本で目につくのは、頭部余白に勅撰集入集歌であればその詞書を朱などによって書入れていることであろう。また巻末には実頼・頼忠・公任・定頼の系譜が示され、公任の経歴などが記される。

これまで述べてきたように、中田本は第一類本・第二類本とはきわめて異質な伝本と言える。歌の脱落や順序など書写の誤りもあるのであるが、それだけではない歌の出入りも見られる。またここでは煩雑になるため取りあげなかったが、各系統相互の本文の違いもある。そういったことなども含めて、再度体系的に伝本を検討する必要があることだけをここでは指摘しておきたい。

#### (47) 伊勢物語肖聞抄

「肖聞抄」の伝本は、(一)文明九年本、(二)文明十三年本、(三)延徳三年本(類従本)の三種が存する。成立後に注記を増補・改訂していった結果による。中田本は右のうち延徳三年本に位置するが、ときに文明十三年本の注記も継承する。延徳三年本は類従本以外に類本がないとされているだけに、中田本は貴重な一本と言える。しかも、中田本は類従本の転写ではなく、明らかに内容を異にする。

#### (54) 源氏物語系図

実隆は長享二年三月に宗祇・肖柏の助力のもとに源氏物語の系図を作成した。これによって、それ以前に流布した諸伝本を古系図と呼んでいく。さて実隆は(一)長享二年本以後、(二)明応八年、(三)文亀四年、(四)永正九年と、改訂の手を加えていった。(一)から(三)にいたる過程では大幅な改訂がなされているが、(三)と(四)は一部の修正にとどまっている。今日もっとも多いのは(三)の文亀四年本系統で、江戸期には版本となつて一般に流布した。中田本も同じく文亀四年本に属する。ただ、巻末識語に「自然斎耕閑軒」と見えるように猪苗代兼載の手を経た一本であったようである。

この識語を持つ伝本は、これまで二、三本が知られているにすぎない。